



N-BLOOD
NISMO Communication Magazine

SAMPLE



NISMO Communication Magazine **N-BLOOD** 2024 / February No.101 Nissan Motorsports & Customizing Co., Ltd.

N-BLOOD

NISMO Communication Magazine
2024 / February
No. **101**

nismo

Produced by Nissan Motorsports & Customizing Co., Ltd

磨き、鍛え、その先へ

波乱万丈の1年間が終わり、東の間のオフを経て、また新たなるシーズンが幕を開ける
SUPER GT、FORMULA E、スーパー耐久、ピレリGT4アメリカ……
いずれ劣らぬ強豪揃いの各カテゴリーで頂点を極めるべく
日産/NISMOは研鑽を重ね、さらなる高みを目指す
日本で、世界で、勇躍飛翔する姿にぜひともご期待いただきたい

SAMPLE

- 4 **SUPER GT SPECIAL TALK**
成長と円熟の相乗効果
- 8 **THANK YOU, MICHELIN**
#ありがとうMICHELIN
- 12 **2023 SUPER GT SERIES-GT500 CLASS**
力走を見せた3号車
ランキング2位を獲得
- 14 **2023 SUPER GT SERIES-GT300 CLASS**
総合力の高さを示し
56号車がランキング3位
- 16 **2023 SUPER TAIKYU SERIES**
1号車は最終戦で2位を獲得
- 18 **FORMULA E WORLD CHAMPIONSHIP**
Formula E SPECIAL Round-Table Talk
- 24 **Pirelli GT4 America × Nissan Z GT4**
ピレリGT4アメリカ・チャンピオンシップ
カレン・ハリソン&エリック・パウエル
- 26 **MOTORSPORTS**
PADDOCK TOPICS
- 28 **NISMO LEGEND CARS**
フェアレディ Z (ダットサン240Z)
『ラリーの日産』の称号を得る
- 30 **NISMO FESTIVAL at FUJI SPEEDWAY 2023**
ステージイベントや同乗走行が再開され
シーズンを締めくくるイベントが完全復活！
- 34 **NISMO PRODUCT**
フェアレディ Z用NISMO パーツが続々登場
- 36 **CLUB NISMO**
大好評！ Club NISMO ジュニアをご紹介します
- 37 **SUPPORTER'S PADDOCK**
ピットツアー参戦記
- 38 **NISSAN/NISMO COLLABORATION GOODS**
インターアライド／EBBRO
- 39 **PRESENT**
読者プレゼント



NISMO 23号車監督

中島健

Takeshi Nakajima

NDDP RACING 3号車監督

島田次郎

Jiro Shimada

SUPER GT SPECIAL TALK

成長と円熟の相乗効果

ふたりの監督に聞く2023年シーズン

開幕戦岡山での1-2フィニッシュで幕を開け
最終戦もてぎまで目の離せないドラマチックな展開が続いた2023年のSUPER GT
3号車を率いる島田次郎監督と、23号車を率いる中島健監督兼エンジニアに
山あり谷ありとなった1年を振り返ってもらった

タイトルを逃した2023年は
悲喜こもごものシーズンに

N-BLOOD 編集部（以下NB）：まずは2023年シーズンの総括をお願いします。

島田次郎（以下島田）：このチーム体制になって2年目なのですが、22年よりも内容は良かったかなと思います。ただ、最後は、結局ランキング2位でチャンピオンを獲れなかったのが、まだ足りないところがありました。嬉しいところと悔しいところと、半々くらいです。

中島健（以下中島）：当然チャンピオンを目指し

てスタートしたわけですが、開幕戦岡山で勝利し、『23年はいいい感じに進みそうだな』と思っていたところ、第3戦鈴鹿で大きなクラッシュがありましたし、中盤の第5戦鈴鹿では車検で落ちてしまいました。本来であれば第3戦から第5戦にかけてしっかりとポイントを稼いで、最終的にチャンピオンを狙うところだったのですが、中盤でだいぶ失速してしまったので、厳しいシーズンになってしまいました。終盤の2戦で2位に入りましたが、なんとかランキング3位を獲ることができましたが、日産陣営全体がチャンピオンを獲るという目標に向けて戦っているの、それをきち

んと達成できなかったのは、とても残念でした。

NB：シーズンのターニングポイントがあればお聞かせください。

中島：ターニングポイント……難しいですね。第5戦の鈴鹿は失格になってしまいましたが、クルマの速さとしてはしっかりと発揮できていました。最終的に結果には結びつきませんでしたが、クラッシュした鈴鹿でドライバー含めきちんと速さを発揮できたという点は、チームにとっても大きかったです。

NB：振り返って、最も印象的だったラウンドはどこでしょうか。

島田：最終戦のもてぎですね。終盤戦に入った頃から、チームでは『優勝してチャンピオンを獲る』という雰囲気でもっていました。しっかりと準備を進め、予選で初めてポールポジションを獲り、レースでもトップを走ることができました。最後は飛び出しましたが、そこまでは思いどおりのレース運びができていました。ひとつの目標のもと、一体感をもって取り組むことができた点では一番いいレースだったと思います。22年は初勝利、23年は初ポールポジションと、これまでできていなかったことが一歩ずつでも達成できるようになったのはいいことだと思います。

中島：最終戦の3号車はパーフェクトでしたね。最後の雨がちょっと余計でしたが、間違いなく素晴らしいレースでした。23号車は良くも悪くも第5戦の鈴鹿です。それなりにサクセスウェイトを積んでいましたが、速さを見せることができて予選2番手、決勝も2位でフィニッシュして、狙い以上のレースができました。最終的に失格となってしまったわけですが、良くも悪くも印象的ではあります。

NB：首位の36号車とは少しポイント差が開いたシーズンでした。あらためて、36号車の強さをどう分析しますか。

島田：36号車は『ここに集中する』という意図のもと、明らかに速いふたりを揃えたチームだと感じます。22年は日産がチャンピオンを獲ったので、絶対に獲り返すという意志の表れでしょう。第1戦岡山ではリタイヤしましたが、残る全戦で点を獲っています。宮田莉朋選手がスーパーフォーミュラ（SF）で勝ってから、SFもGTも、はっきりと迫力が増したと思います。ライバルながら、あまり弱点のないチームでしたね。

中島：まず速いドライバーの組み合わせ。宮田選手もそうですが、ここ最近では坪井翔選手もとても安定していますし、速いと思います。それにピットワークを見ていると、TOM'Sのなかで精鋭をまとめたのではないかなという印象ですね。

確かな成長を見せた千代と高星
円熟味を増した松田とロニー

NB：ドライバーの印象についてはいかがでしょう。まずは3号車のふたりからお願いします。

島田：千代（勝正）選手は22年も良かったのですが、23年はほとんどパーフェクトに近いドライビングだったと思います。彼の強みは、レースをしながら作戦に関してやりとりをして、フレキシブルに対応できることです。最近のSUPER GTはタイヤの数が減り、走る時間も短くなっていますから、昔みたいにブラクティスで走り込んでレースに当て込むやり方がしづらくなっています。走り出してみないと分からないという部分も増えてきているので、そうした点で良い面が発揮できていると感じます。

高星（明誠）選手は予選がかなり良くなっています。実際にリストリクターが3段階絞られた第6戦SUGOでもQ1を突破していますし、最

終戦のもてぎでは、ふたりともトップタイムでポールポジションを獲れました。特に予選の速さでは23年は、かなり進歩したなと思っています。今はレースの構成上、どのチームでも後半に乗るドライバーの方が長時間走ることが多く、高星選手には条件が厳しいところを担当してもらっているの、見た目ではライバルに負けているシーンもありますが、そこは割り引いて考えなければいけないですね。

中島：千代選手はこれまで少し遠慮がちだった、ちょっと精神的な弱さを見せる部分がありましたが、30歳をすぎて『自分がチームを引っ張る』という姿勢が見てとれるようになったと思います。22年～23年と大きく成長して、いいドライバーになったなというところですね。

高星選手はいつも飄々とつかみどころのない感じですが（笑）、今まであまり意見を言わなかったような場面でも、しっかりとコメントするようになっているなと思います。周りもそうですし、私自身もそう感じています。彼も千代選手とともに、とても成長しましたね。

NB：23号車のベテランふたりについてはいかがですか。

中島：まずロニー（クインタレリ）選手は本当に円熟しきっているというか、予選も速かったし決勝も安定していました。たえ何かトラブルが起きたとしても冷静に対処してくれます。まさに“ドライバーの完成形”だなという年でしたね。

（松田）次生選手に関しては、第3戦のアクシデントから一緒になって色々なハビリをやりました。次のレースまで2カ月ほど間が空いていたというラッキーもありましたが、精神的にも体力的にも元のレベルに戻せた点は素晴らしいかなと思います。その後も臆することなく、今までどおりの次生選手で戻ってきてくれました。年齢はロニー選手と一緒に、あの歳で高いパフォーマンスを発揮できるのはすごいと思いますね。

島田：ロニー選手は一番経験を持っていますから、2台のタイヤを選ばなければいけない場面があった時にも、適切な提案をしてくれます。自分だけ

の好みではなく、全員のことを考えた選択をしてくれるので、そういう部分に助けられていますね。

次生選手とは一緒に組んでいたこともあります。第3戦のアクシデントでは精神的にも大変だったと思いますが、最終的には元に戻ってくれて、まだまだ全然行けるぞという力強さが伝わってきましたね。

NB：レース運びや戦略など、おふたりの考え方の違いが出る部分はありますか？

中島：もちろん情報は共有していますが、シーズン中はそれぞれサクセスウェイトの状態が違うので、そうすると“どのクルマと戦っているか”がまったく変わってくるのです。とは言え、同じミシュランタイヤを使っている限りは共通する部分もあり、同じような戦略になることもありますし、サクセスウェイト的に同じ戦略を採れない時もあります。

島田：確かに毎戦ごとに条件が異なりますから、明確な違いとなると難しいのですが、大ざっぱに言えば3号車の方が煮え切らない準備や戦略を採っていることが多いですかね（笑）。もともと思い切りのいい方ではないので、状況がどう転んでもどうにかなるようになって。それが100点じゃなくて90点くらいになってしまう理由なのかもしれません。大きく見れば、そういう傾向がある気はします。

NB：それぞれ狙いが当たったレースや、大きく外してしまったレースはありますか？

中島：良かったのは第6戦SUGOですね。残念ながらポールポジションは獲れなかったのですが、サクセスウェイトを搭載しながらも2位でフィニッシュできたのは良かったです。天気やその他の条件など色々なことを考慮し、タイヤ選択を含めた戦略がハマりましたね。外してしまったのは、その次の第7戦オートボリスです。GT500勢では唯一の3ピット作戦で、どんどん速く走れる予定だったのですが、速さを発揮できずに沈んでしまいました。

島田：3号車はあまり大はずしはなかった気がし

1-2フィニッシュを達成し、最高の出走となった開幕戦岡山。悪天候で先の読めないレースのなか、チームの総合力が好結果につながった。



ますが、オートボリスはわりとうまくできた手応えがあります。初めての450kmだったので、早くピットインしたり、3回止まったり、色々な戦略を採るチームがいました。我慢して引っ張りましたが、後半勝負かなという部分は、大体当たっていたかなと思います。

NB：2年目を終えての自己評価をお願いします。

中島：自分的には20点くらいですかね。エンジニアと兼任なので、両方うまくいけば両方とも100点になりますが、チャンピオンを獲れない時点で話にならないので……。そういう意味では20点くらいだと思っています。

島田：50～60点ほどでしょうか。元々通常の監督さんのやる仕事の7割ほどしかできないし、やらないというスタンスでやっているもので、満点でも70点くらいしかいかないのですが。それでもまあチャンピオンを獲っていれば100点でもいいと思いますが、獲れていないので半分ほどですかね。

エンジニアの経験や他チームでのキャリアが活きる

NB：中島さんは現在もエンジニア兼任で監督を務めています。島田さんもエンジニア出身の監督です。これまでのエンジニア経験が役に立った場面はありますか？

中島：クルマのラップタイムやタイヤ選択など、他チームのことも予測できますから、色々なことを考えられるというプラスはあると思います。昔の話になってしまいますが、エンジニアをやる前にはメカニックをしていた経験もあるので、チーム全体が見えていればいいなと思っています。今のメカニックの頭の中身がどうなっているのか、という問題はありますが、基本的にはベースは一緒だと思いたい（笑）。

島田：私は監督といっても、たとえば星野一義さんや鈴木亜久里さんのようにカリスマ性や実績があるわけでもないの、役に立つというより、エンジニアの仕事を今も続けているイメージの方が強いですね。色々なタイプの監督がいると思いますが、エンジニア経験があって、レース数をこなしているという部分だけで監督をやらせてもらっている感じなので。

中島：星野さんや近藤真彦さんは、ドライバーでありチームのオーナーでもありますからね。そこから出てくる言葉は、やっぱり重みがあります。チームの精神的支柱にもなるでしょうし、そういう部分が私たちとは大きく違うと思います。

島田：ドライバーに対する声のかけ方もだいぶ違いますね。自分で乗っていた人は良く分かると思うので、ドライバーの心理状態に合わせて気の利いたことを言えるのだと思いますね。私はどうしても数字関係や「あと何周で何秒」って言いがちですが、ドライバー側からしたら「ちょっとこっちの気持ちも考えてくれよ」って思われているかもしれませんね。

NB：NISMO以外のチームでの経験が、今に活

きている部分はありますか？

中島：もしNISMOでずっとやっていたら、ひとつの考え方みたいなところから抜け出せない場面もあるかもしれませんが、海外や国内でもいくつかのチームと一緒にやらせてもらっているの、で、「あ、チームが違うと考え方がこんなに違うのね」と。同じ立場の人でもやっていることのボリュームや幅が違うので、そういうことも踏まえて人と接することができるようにはなったなと思います。

島田：TEAM IMPULが長かったのですが、ご存じのように体育会系のチームなので、それに打ち勝つ根性も身につきました（笑）。あとは、フォーミュラニッポン（現・スーパーフォーミュラ）をやらせていただいたりもしました。御殿場に住んでいた人が何人もいたので、皆さんの顔も分かるようになりました。そういう面でも良かったかなと思います。

NB：他チームの監督を見ていて勉強になった部分や、反面教師となった部分はありますか？

中島：星野さんは、レースを見ていてあれほど熱



同じエンジニア出身の島田監督と中島監督。レース観戦の際にはふたりの采配の違いにもぜひ注目していただきたい。

くなれるのはすごいと思います。のめり込めるのは、良い面もあり悪い面もありますが、その熱さは忘れずに持っていたいと思いますね。

島田：星野さんについては“手の当たる位置”にいたので、私の見解は全然違います（笑）。中では、柿元（邦彦）さんですかね。“レース界の人”だなど。レースも数多く観ていますし、ドライバーの知識も非常に幅広い。レースの話が一番通じるという印象が今もあります。常に色々なことを考えていましたし。



成長著しい千代と高星、ベテランの妙味を発揮する松田とクインタレリ。情報を共有しながらお互いに高めあえる存在だ。

NB：お互いの長所を、どう捉えていらっしゃるんですか？

中島：島田さんは、自分でも言っておられましたが、嫌なものは嫌、とはっきりしているの、変な言い方ですけど「サラリーマンしていない」。自由にやっているの、そこは自分にはないところかな。ひとつのことに集中できる環境っていいことだと思います。

島田：私になくて中島さんにある良いところは、思い切りの良さだと思いますね。第1戦岡山で

も、あのタイミング、1周だけでウェットに替えて勝った。ああいうのは真似できないなと。決断にスピードがあって、その点はすごいと思います。

NB：それぞれのチームはどういう存在でしょう。

中島：同じクルマ、同じタイヤを使って、同じシリーズを戦っているの、まずはライバルですよ。でも、同じ会社のなかでいて、同じ目標を目指しているの、そういう意味ではチームメイト。心強い戦友というところでしょうか。

NB：3号車が勝った時はどう思いますか？

中島：もし2台で競って負けたのであれば、それは悔しいです。でも、今のところ2台で競うような感じにはなっていないので。普通におめでとうございます、ですね。

島田：2台いて、同じタイヤを装着しているので色々なデータが得られますし、話も直接聞くことができます。お互いそうだと思いますが、1台で運用しているよりも力になってもらえる点はあるがたいですね。ライバル心については、私だけかもしれませんが、まったくほかの13台と変わりありません。他チームのポイントや速さはまったく

くコントロールできないので、あまり考えもしないですね。「次のレースの時にウェイトが何kgだからこのあたりのポジションだろう」みたいなことは考えますが、いわゆる“23号車だから”というライバル心はゼロです。

NB：開幕戦では2位でしたが、それでもゼロですか？

島田：こっちが下だったので悔しい部分はありますが、仮に他のメーカーが1位で3号車が2位でも、悔しさの量はあまり変わりませんね。

獲り逃した頂点を目指してリベンジ誓う24年シーズン

NB：常に結果を求められるトップチームをまとめる秘訣とは？

中島：まとめられているのか疑問ですが（笑）、全員がレースに勝ちたい気持ちで仕事をしているので、変に気持ちを削ぐようなことはしたくありません。自分も常に勝ちを目指す姿勢を示していきたいと思います。

島田：私はまとめていないです（笑）。もともとマネジメントみたいなことが嫌でエンジニアになっているので、最初からやらないぞと宣言しています。結局はレースですから、数字が出て順位がついて、結果が良ければ自然といい方向にまわるものだと思います。だから、そのサイクルを保てるように頑張らせて感じて、あとは許してくださいというスタンスでやっています。

NB：その分、ひとつの目的に向かって全員が団結した時には、より大きな力が出せるということですね。

島田：まあ、そうですね。「負けてもいいや」という人はいないので。実際、チャンピオンがかった最終戦ではピリッとした雰囲気もありました。チームとしていい経験になると思うので、24年はもうひとつ上の段階を味わえるようにしてあげたいですね。

NB：あらためて、24年シーズンへの抱負を聞かせてください。

中島：抱負は“チャンピオン獲得”なので、毎年変わりません。ただ、チャンピオンを獲るのは当然の目標として、そのなかでも気持ちのいいレースをしたいなと思っています。どんな順位で終わっても、レースが終わって「いい戦いだっただね」と、皆で言えるようなレースをしたいと思いますので、ファンの皆さんにも引き続き応援をよろしくお願いします。

島田：目の前のところでチャンピオンを2年続けて逃してしまっているので、24年こそはチャンピオンを獲りたいという気持ちが一番強いですね。順当に勝ちを積み重ねて……未勝利チャンピオンでも、個人的には構わないのですが（笑）。もう1年、この悔しい思いをしているチームでやりたいというのはありますが、そこは私には決められないので。できたチームでベストを尽くしますので、ぜひとも引き続き応援していただけたらと思います。

チャンピオンを獲るのは当然の目標ですが、気持ちいいレースをしたいと思っています。

2年続けて王座を逃してしまっているので、24年こそは、という気持ちが一番強いです。